

「評

老澤衷・近藤成一・甚野尚志編

『朝河貫一と日欧中世史研究』

(古川弘文館、二〇一七年)

小澤 実

本書は、私立大学戦略的研究基盤支援事業「近代日本の文学と東アジア文化圏 東アジアにおける人文学の危機再生」(平成二六・三〇年、早稲田大学、代表者李成市・学術院教授)の一環として、二〇一五年二月五日に稲田大学小野記念講堂で開催されたシンポジウム「朝河一と日本中世史研究の現在」での報告成果を中心にまとめた論集である。目次は以下の通り。

えがき

1部 日欧の比較封建論と現代

朝河貫一と日欧比較封建論―「朝河ペーパーズ」の「封

建社会の性質」草稿群の分析：甚野尚志

越前国牛原荘の研究と朝河貫一：似鳥雄一

第2部 朝河貫一の中世史像と歴史学界

『入来文書』の構想とその史学史上の位置―日欧の中世

史研究からみて：佐藤雄基

朝河貫一と日本の歴史学界：近藤成一

鎌倉幕府の成立と惟宗忠久―朝河貫一研究との関連で：

海老澤衷

第3部 朝河貫一の活動とイェール大学

朝河貫一とイェール大学日本語コレクション―構築・目

録作成、整理の葛藤：中村治子

朝河貫一の生涯―家族・知人・教え子：山内晴子

付録

1 イェール大学所蔵朝河関連資料および参考文献：中

村治子作成

2 朝河貫一とオットー・ヒンツェの往復書簡：甚野尚

志作成

3 「朝河ペーパーズ」の基礎的研究 補遺―朝河研究

の課題として：佐藤雄基作成

英文要旨 Summary

現代における朝河研究の意義を述べた「まえがき」のちに、内容別に七本の論文を三部に分割して配置し、最後に付録を付す。論集名にある「日欧中世史研究」に関わるのは第1部と第2部であり、それらも、朝河の国際的視野に立った比較研究を詳細に論じた甚野論文と佐藤論文、日本史上の特定のトピックを扱う似鳥論文、近藤論文、海老澤論文に細区分でできるように思われる。西洋中世史を専門とする評者のもつ一定程度の理解力はとりわけ朝河の比較史アプローチの史学史上の位置付けに限定され、なおかつ紙幅にも限界があるため、以下、本来の章立てから離れ、(一)第3部(中村、山内)、(二)日本史トピック(似鳥、近藤、海老澤)、(三)比較史(甚野、佐藤)の順に検討したい。

(二)第3部(中村、山内)

中村論文は、イェール大学東アジア図書コレクションの初代部長としての朝河の役割を、中村自身が発見した朝河のノートブックと報告書のデータに基づき、詳細に検討する。本論考は、朝河の活動を中心に据えてはいるものの、イェール大学東アジア図書コレクションの蔵書構築と図書分類法をめぐる日米関係史という、より大きな図柄を描き出している。その中でとりわけ興味を惹かれるのは、イェー

ル大学図書館の蔵書構築と分類方法に対する朝河自身の考えが、アメリカの大学図書館を席卷しつつあったハーバード大学イェンチン図書分類法と対立した時に、朝河が大学図書館長と大学管理職宛に日本語書籍の目録に関して提出した意見書(一九四八年四月一六日付)である。朝河は、ハーバード大学イェンチン図書館の図書分類法という、一見ソフトな文化政策を通じた分類法に皇帝統治を思い起こさせる中国の覇権主義を嗅ぎ取り、その政治性を含めて批判しているという。

山内論文は、回覧を前提に執筆された朝河の個人宛公開書簡(open letter)などを史料とし、国際政治学者としての朝河の側面を浮上させたい。そうした国際政治学者としての朝河を涵養した人的ネットワークを再構成する。一九世紀後半から二〇世紀前半同時代の国際政治を論評する歴史家は珍しいわけではないが、従来、そうした論評に対する研究は十分に蓄積されてきたとは言いがたい。朝河の『日本の禍機』や戦後日本の体制への提言など、研究者間では知られていながら、歴史家としての朝河とは切り離されて論じられてきた傾向がある。本論考の人的(書簡)ネットワークは、そうしたバラバラに論じられてきた歴史家、国際政治学者さらには政策提言者としての朝河を結びつけるデータを提供しつづけると言える。

いずれも論集タイトルの「日欧中世史研究」とは直接繋がってはいないが、書き込み・蔵書研究とプロソポグラフィは、文学史学研究では成果の見込める常套アプローチでありながら、従来の朝河研究では必ずしも十分におこなわれてこなかった手法である。その結果として国際人としての朝河とその朝河の活動を通じた世界の縮図を看守することができる。今後の朝河研究の基礎たりうる論考である。

(二) 日本史トピック（似鳥、近藤、海老澤）

似鳥論文は、朝河の死後刊行された『莊園研究 (Land and Society in Medieval Japan)』（日本学術振興会、一九六五年）において中心的検討対象とされる「越前牛原莊 (Ushiga-hara Sho, Yechizen)」に関連する研究と史料を再検討し、当該莊園に関する研究現状をまとめたいうえで、朝河の研究の特徴を浮き彫りとする。結論として似鳥は、朝河が指摘した、当該莊園の検討によって「領主にとっては高収益ではあるが多くの面積は確保できない」とする見解に妥当性がないことを指摘し、さらに、中宮賢子の菩提寺である円光院運営費を賄うために立荘された牛原莊の莊園としての確立において大きな役割を果たしたのが、賢子の異母弟にして円光院別当であった三宝院定海であったことを明らかにしている。朝河の議論をより精緻化し、現

在の日本中世史研究の水準に朝河の関心を発展させた点において大きな意義を持つ論考と言える。

近藤論文は、朝河の生前における日本歴史学会との関係、とりわけ黒板勝美が一九一五年に『史学雑誌』で紹介した論考「朝河氏の『日本莊園の起源』を読む」（『史学雑誌』二六・三）と、同年刊行された、その評に対する朝河の反論「日本封建土地制度起源の拙稿につきて」（『史学雑誌』二六・六）とを検討し、朝河が黒板の理解のどの部分に不満を持ち、どのように理解されることを望んでいたのかを検討する。要点をまとめれば、朝河の不満は、自説が「日本における莊園の起源と封建制の起源をはっきり区別して論じたのであるが、その点を黒板が理解していなかった」（一一四頁）ことにある。些細な点に見えるように思えるが、近藤の指摘にしたがえば、「一九一〇年代の日本の歴史学界は、少なくとも黒板が莊園の起源と封建制の起源とを区別を理解しないような段階」（二二四頁）であった。これは中世という時代をどのような構成要素でもって捉えるかという論点に関わることを思えば、朝河の学説の理解を証言するとともに、同時代の日本における中世観を検討するに際して重要な論点たりうる。

海老澤論文は、朝河最晩年の仕事である雄編「島津忠久の生ひ立ち 低等批評の一例」（『史苑』一一一四、

一九三九)をとりあげ、入来文書を含めた鎌倉期南九州研究が朝河の研究活動にとつて持ち得た意味を、日本中世史の学説史の中から描き出す試みである。海老澤は、朝河が用いた史料を再検討するとともに、朝河以来蓄積されてきた惟宗忠久(のちの島津忠久)に関する研究を整理することにより、朝河の問題関心に対する現在の回答を提示すると共に、朝河自身の問題意識にも踏み込んだ。朝河の当該論文において注目すべきは、惟宗忠久の出自に関する伝承が幾重にも重なり史料として伝来している点に朝河が注目し、「伝承がどのような事実の上に構築され、長い時代の中でどのように有効性を保ち、取捨選択されていくか」(二六六頁)を説明しようとした点に注目しているのは、朝河の方法論を再構築する意味でも興味深い。

日本中世史家である似鳥、近藤、海老澤はいずれも、朝河の執筆した「小さな」成果に注目しながら、その背景にあった朝河の比較史・世界史的な方法論を引き出している点で共通する。先達の成果の継承かつ展開という学問の基本作法を通じて朝河の問題系をおしすすめたのがここできりあげた三本であるといえる。

### (三) 比較史(甚野、佐藤)

甚野論文は、朝河による未刊行の日欧比較封建制論に關

史苑(第七八卷第一号)

する草稿群の分析を通じて、彼がどのような基準で日欧比較の議論を再構成していたのかを考察する。中世史家として『入来文書』と『莊園研究』を残した朝河は、日欧を対象とした比較封建制論の著作を構想していたが、それは実現することなく終わった。しかし、朝河ペーパーズに残された記録を参観する限り、その構想の大枠は把握しうる。甚野は、マルク・ブロックの『比較史の方法』とオットー・ヒンツェの『封建制の本質と拡大』を念頭に置きながら、朝河の独自性を抽出する。その結果として得られる朝河の封建制論は、「直接に影響関係のない日欧の中世に生じた類似の支配のあり方をどう比較するかという問いから発し、歴史的事体の比較を超えて、社会的諸要因の結合という視点から封建制を説明しようとする試み」(二五頁)であった、とする。本稿で分析した草稿群は、朝河がのこした比較封建制論の草稿の一部であり、「全体の分量を合わせるに優に一冊の書物ほどはある」(三一頁)内容を持つ。さらなる分析が期待される。

佐藤論文は、『入来文書』とその関連書籍になるはずであり、朝河ペーパーズにその草案が残されている『南九州の封建体制』の成立プロセスを、それが執筆されたアメリカ、それを分析する手法が成立したヨーロッパ、それが対象とした日本という三点の視角から分析を行う。とりわけ

佐藤が注目するのは、中世社会における主従の「力関係のなかで主人が従者に正義の義務を負う側面を認めつつ、契約観念の弱さ」（九三頁）である。このような論点に到達するために朝河は、直接的に教えを乞い参照したアメリカの中世史研究のみならず、フランスの地方史研究やドイツの公法史研究を吸収しつつ、中田薫らの日本対象とした封建社会の研究にも親炙する。こうした微細なテキストの受容分析を行うことで、朝河の関心が、特定地域の地域研究を通じてより高次の日本社会全体の封建体制の特徴を抽出しようとする演繹的態度から、天皇のような公法的存在を基準単位とし国家間比較を構想するようになった、とする指摘は興味深い。他方で、従来さほど論じられてこなかった朝河の封建論の日本における受容を、牧健二を事例として論じた点も、朝河の受容論という点から今後深めてゆくに値する内容であろう。

狭義の史学史研究として朝河のテキストとその成立コンテキストに深く立ち入っているのは、本論集においてはこの甚野論文と佐藤論文の二本である。甚野が、朝河の残した草稿から朝河の比較史の作法を再現しているのに対し、佐藤は、史学思想の受容連鎖をひもときながら地方史から国家史という朝河の関心の遷移のなかに主著『入来文書』を位置づけている。西洋史家である甚野と日本史家で

ある佐藤のそれぞれがもつ背景知識は異なっており、あえて強調するならば、甚野が朝河の思想に見える「比較 (comparison)」に目を向けているのに対し、佐藤は「接続 (connection)」を掘り起こしている。いずれの要素もグローバルヒストリーという手法の底流にある考え方であり、それは図らずも朝河の史学思想が、昨今進められているかたちでのグローバルヒストリーという潮流と適合していることを示唆している。

以上、評者の関心に従った収録論考の紹介を行った。寄稿論文のいずれもが従来知られていなかった朝河の学的側面を掘り起こしており、本論集が今後の朝河研究にとって不可欠の貢献をなしていることは言を俟たない。とりわけ上記(一)と(三)の論考群は、いずれも続編を予想させる内容であり、世界史上に名を残す歴史家としての朝河貫一像へとまた一歩近づくであろう。その上で、二点付言しておきたい。

第一に、朝河の遺産としての比較封建論論について。封建制というのは、言ってみれば手垢にまみれた言葉で、そこに一義的な定義を見出すことは難しい。含意される要素のみならず *feudalism* というその言葉自体が構築主義的に形成されてきたものであることはエリザベス・ブラウン

やスーザン・レイノルズが十分に論じており、現在のヨーロッパ史学は、一応そうした構築主義の指摘を容れたうえで、中世ヨーロッパ社会の構造を理解するための基本要素としての封建制を再定義している。その延長線上においてクリス・ウィツカムは、初期中世ヨーロッパ半島を舞台としたモデルを構築し、地域間比較を試みている（Chris Wickham, *Framing the Early Middle Ages*, Oxford: Oxford UP, 2005）。

ある意味、朝河の試みは、このような構築主義とそれに伴う比較作業の先駆けとも言える。先駆けであると同時に、より世界的な射程をとまなう試みでもあったといつて良いかもしれない。そして朝河は日本とヨーロッパに対して比較実践を行った際、日本は唐の律令体制の、メロヴィング朝フランク王国はローマ帝国の影響下にある点を指摘していた。これはきわめて重要な指摘である。マルク・ブロックの比較作法によれば、日欧では所与の諸条件が異なるため適切な比較ができないことになるが、朝河の作法によれば、より高次の社会システム（それも明文法的・文書主義的）の影響圏のなかで辺境に位置する地域の比較には意味があり得る。朝河がその後どのような説明を日欧の封建制発展のために持ち出すつもりであったのかはわからないが、ユーラシアの東西に展開した古代文明を継承した辺境

における社会システムとしての封建制という見通しは、現在でもなお十分に検討に値する課題である。

第二に、朝河の史学方法論形成について。一九三九年の『史苑』所収の「島津忠久の生ひ立ち 低等批評の一例」は、単なる個別研究ではない。論文冒頭で「低等批評・高等批評」という文献学とりわけ聖書文献学の手法を朝河なりの経験に基づき一般史学に適用するやりかたを宣言している。「低等批評」とは「（一）史的材料の文字の語る所を吟味して、（二）その示し得る史的事実を追及及び組織の対象とする」批判であり、「高等批評」とは「（一）かかる材料と其文言との出現を可能ならしめた背後の事情及び觀念を捉へて、（二）其處に無言のうちに存在し得る法制、社会、経済、文化等の地盤を追求し、（三）此地盤の上に如何にして現在の材料の示すごとき現象を生じ得たか、且つ如何にこの現象の発言がかの地盤にはどうし得たかを考察する」ことである、としている。現在の我々からすれば特別な新鮮味のない、歴史学としては根本的であるこの手法は、一九三九年という時点を考慮しなければならぬ。ヨーロッパの歴史学において、法制史料のみならず、多様であり得る「史的材料的文字の語る所を吟味して、社会（経済）史や文化史が試みられようとしていたときである。本論考において朝河が対象としているのも、島津忠久の生まれに

関する伝説を記録した幅のある諸叙述史料である。それがどのようなものであれ、「史料に問いかける」というプロックの実践を試みていると言える。

以上の史料に対する態度を勘案するに、第一点と合わせて、朝河は、個別論点を単に掘り進める歴史家ではなく、史料に対する「低級批評」と、そこから導き出された事実に対する「高等批評」という双方の点において世界的な観点に立ち、普遍的方法論を模索する一般史家でもあったことが想定される。この場合の一般史家とは、世界の歴史が段階的に同じ歩みを持つであろうといった発展段階論風の一般理論ではなく、地域ごとの特異点を認めながら、その特異点を集積することで時代地域の特性を明らかにする態度である。このような態度の形成にあたっては、国家単位や地域単位の個別研究を好む欧州ではなく、日本とヨーロッパというユーラシアの東西端の歴史に、愛国・愛郷主義的傾向に距離を持ってアクセスすることのできるアメリカで研究生活を送ったということが多少なりとも関係があるように思われる。

私の知る限り、現状においてアメリカ史学史の研究はさほど進展しているように思われぬ。どちらかといえば、日欧の歴史学のなかに朝河を位置付ける研究が主流であるように思われるが、それはそれとして、中村論文や山内論

文が腑分けするように、朝河は、制度的にも、思想的にも、人脈的にも、アメリカに立ち位置を置く知識人である。今後一つの方向性として、封建制、比較史、客観主義といった朝河の立場を理解するためにも、アメリカ歴史学の潮流や、その他者として日欧の歴史を見るアメリカの外国史研究の蓄積の中に、朝河を位置付ける試みがあっても良いのかもしれない（佐藤論文にその初発的な試みは見られる）。むしろアメリカのなかでは忘れられた中世史家となっている朝河の研究は日本語でこそ蓄積されつつある現状を鑑み、研究成果の世界市場への還元という意味で、レジューメではなく英語でのフルペーパー報告がなされることを期待したい。

（本学文学部准教授）

※訂正

本書評につきまして、左記の訂正がございます。

（二七八頁・タイトル）

（誤）「古川弘文館」（正）「吉川弘文館」

以上の誤りを謹んでお詫び申し上げます。

立教大学史学会史苑編集委員会